

## 第二章 釈迦の成道

## 六、ある誌友の悟った実話

(162)

それについておもしろい話があります。丹波のある町に、この人はただ今生長の家誌友相愛会を開いておられるのでありますが、ちょっと名前が思い出せませんが、その人が、ある時この世の中が出家前の釈迦のようになつたのであります。死のうと思つて三度自殺したのでありますが、三度とも死ねなかつたのであります。それから今度こそ本當に自殺してやろうと覚悟しましたが自殺する前に、せっかく自殺するんだから、一度だけ宝塚の歌劇を観ておいて山水明媚さんすいめいびの地で自殺してやろうと思つて宝塚まで出て来たのであります。さてだいで歌劇を観くたびれて劇場を出て、売店でバナナが食べたくなつて買いましたら、売店の主人がそれを新聞紙に包んでくれたのです。食べながら新聞紙を披ひらいてみると、そこに『生命の實相』の広告が出ていたのです。「おや生命の實相！ 生命の本當の相すがたはどんなものか」死のうという人は生命という字が気になるらしいのですが、その人は死ぬまでに、よく生命の本質を知つても死ぬに遅くないと思われまして、一つこの本を買つて読もう、どこで売つてあるのかと思つてみると、その時分は支部の名前がずつと広告に列べて出ていた頃でありました。見ると、神戸にも取次所がある。あの神

戸は一度だけ行ったことがあるが、死ぬまでにあの港の町をもう一度見たい、そして神戸の取次所で『生命の實相』を買おうとお考えになつたのであります。当時ありましたが神戸の大丸百貨店の前に最新の流行品を売つてゐる三沢商店——そこが『生命の實相』の取次店になつておつたのであります。『生命の實相』を読んでから死んでやろうと思つて、そうしてそまでおいでになつて『生命の實相』を買つて読んだのであります。そうして『生命の實相』を読んだときに、この人は釈迦が悟りを開いた時のように自分もまた心がクラリと一変してしまつたのであります。この世界は悲惨み充みち満みちたる殺し合ひの世界であると思つておつたら、殺し合ひの世界ではなく、生かし合ひの世界だとお悟りになつたのです。表面だけは殺し合ひのように見えることもあるけれども、本當は生かし合ひの世界なのだ、いのちの本質の中では、生かし合ひだということが分かつたのであります。すなわちこの世界は「有情非情一切成仏」のありがたい世界だとわかつたので、その人はもう死ぬことをやめて故郷へお歸りになつて百姓の生活を営まれたのであります。今までは百姓してもつまらなかつたのですが、今度は喜んで百姓をおやりになつた。ちようど春の始めのことでありました。土を耕そうと思つて鋤くわをもつてコンコンと土を上下にひっくり返しておられました。すると冬眠してゐた蛙がびよんびよんと出てくるのであります。それが少しも傷つかない。今までは春になつて畑を耕すときには、いつも隠れてゐる蛙の大腿部を鋤でちよん切つたり、鋤すきで頭をちよん切つたりして、蛙に怪我をさせるのであります。ところが、その人がこの世界は「生かし合ひの世界だ」と

悟って以来、少しも蛙たちが怪我をしないのだそうでありま  
す。「おや、鍬が蛙の頭にふれた」と思って、見ると少しも怪  
我しないので、みんな、ぴよんぴよんと喜んで感謝しながら跳  
んで行くのです。なるほど、これは生かし合いの世界であつ  
た、今まで自分は農夫の鍬と蛙だちとは殺し合いの世界だと  
思っていたけれども、実の相はそうではなかったのだ、今ま  
で自分の心が迷いに執われてプリズムのように曲折はげしい

念のレンズで覗いておったからこそ、鍬の先端と、蛙の頭と  
が衝突して切れたように見えたのだけれども、妄念のレンズ  
を取り外して素透しの念になつて実相を見るようになった時  
この人の周囲に展開する世界の相が変わつてきたのでありま  
す。「そうだ、百姓は今まで『蛙切り』だと思つていたが、蛙  
生かしだったのだ」と気がついたので。われわれが実相を  
見る眼を開いて見るとき万物互いに生かし合いならざるはな  
いのであります。蛙は冬が来れば穴を掘つて冬眠するけれど  
も、春が来てばかばかして来て暖かくなると外へ出たくなる  
のですが、自分の体力で外へ飛び出すには冬じゅう食物を食  
わずに冬眠していたので腹も減つているし、よほどの努力を揮  
い起こさなければ土の底から地表へ出ることができない。そ  
れを百姓が上から掘つて土を除いてくれるのです。そうする  
と楽楽と外へ出られる。蛙の方からは百姓が鍬で掘つてくれ  
るからこそ助かるということになるのであります。このよう  
にすべての生き物は互いに生かし合つて居るのです。この生  
かし合いの世界が、本当の世界であつたということがお分か  
りになつて、この方はただ今、誌友相愛会を開いておられる  
のであります。そういうふうには万物生かし合いの世界の本

当の相をお悟りになつたのが釈迦の悟りの心境であつたので  
しょう。悟つてみればすべてのものは仏の智慧に支配され、  
すべてのものは仏の愛に護られ、すべてのものは仏のいのち  
に生かされている。山川草木獣虫魚介ことごとく仏の姿で  
ある。みんな助け合い拌み合いの世界である。今までこの世  
界は地獄相だと思つておつたが、あにはからんや本当は極楽世  
界であつたとわかつたのであります。

#### 第四章 仏教とキリスト教とはかくして融合す

### 十三

般若(はんんにや)は梵語(ぼんご)、此(こ)には智慧(ちえ)と言う。諸々の境界(けいがい)を逐(お)うて、心、  
真(ま)に背(そむ)くが故(ゆゑ)に無我(むが)を知らず、我(わ)は即(すなは)ち愚癡(ぐぢ)の全体(ぜんたい)なり。愚癡(ぐぢ)  
を離(はな)るるを智(ち)といひ、其(その)の方便(はんべん)あるを慧(え)という。智(ち)は慧(え)の体(たい)、  
慧(え)は智(ち)の用(もち)なり。衆生(しゆじやう)本来(ほんらい)具足(ぐそく)す。三世(さんぜ)の諸(しよ)仏(ぶつ)、歴代(れきだい)の祖師(そし)、  
天下(てんか)の老和(らうわ)尚(しやう)、之(これ)によりて妙用(めうよう)を施(せ)し、神通(しんとう)を現(あらわ)し、唱(な)を  
下(くだ)し棒(ぼう)を行(な)はず、真(ま)の般若(ぼんげ)は文字(もんじ)に非(あら)ず、蠢動合靈(しゆんどうがうれい)本来(ほんらい)の真性(しんじやう)  
なり。(蘭溪(らんけい)禪師(ぜんじ)『註心經(しゆしんきやう)』)

蠢動合靈(しゆんどうがうれい)とは、靈(れい)を備(そな)へてうごめいて居る者、すなわち生  
きとし生けるものことであります。生きとし生ける者の本  
来の真性(しんじやう)、その実相(じつさう)そのものは物質(ぶつしつ)ではない。このままに「般  
若(ぼんじやく)」そのものの智慧(ちえ)そのものだと言(い)うのであります。われわれ  
の木体(もくたい)は物質(ぶつしつ)身(み)ではない、肉身体(にくくたい)身(み)ではない、智慧(ちえ)身(み)である。  
宇宙(うちゅう)に満ちて居る觀自在(くわんじざい)の智慧(ちえ)である。宇宙(うちゅう)に普(あまね)く満ちて居  
る智慧(ちえ)(賢(けん))そのものが、「身をちぢめて小(こ)ならしめ」(『觀普

賢菩薩行法経』で、仮に、物質身に見えて顕われているのがわれわれ人間であります。だからわれわれ人間はこの身このまま普賢菩薩（遍満の智慧身）なのであります。智慧自在、観察自在、観るにしたがって観るとおりに自在に方便身を顕するので、観自在菩薩とも申すのであります。われわれはこの身このままが観世音菩薩であり、普賢菩薩なのであります。どこに病気がある、どこに悩みがある、どこに不幸がある。そんなものはないのだ、全然ないのだ。それを知らぬから苦しむのだ。知れ、知れ、汝の実相身が観世音菩薩であり、普賢菩薩であることを。その時たちまち汝の病は、不幸は、自消自壊してしまふのであります。

われわれ人間がここに生きているのは「神の子」の生命が生きているのである、神聖受胎である。これを英語では Immaculate Conception と言う、汚れない妊娠（不染妊娠）である。肉欲によって生まれたのでもなければ、姦淫によって生まれたのでもない。『生命の真相』の真相篇には、「人間は未だかつて女性の子宮から生まれたことはない」とハッキリ書いてある。常識的に考えたらずいぶん乱暴なことを書いたものだと思われるかもしれませんが、常識的人間観というものは五官知を基礎とした迷妄であり、それゆえにこそ知恵の樹の果（五官知）を食べた人間は「汝は塵なれば塵に帰るべきなり」と久遠生命を否定せられたのであります。久遠生命（死なない生命）を奪還するためには、五官知を否定しなければならぬ。見える象は必ずしも実相ではない。実相は五官知を否定（五蘊皆空と照見）することにより把握せられるのであります。そのためには、「五官の世界を去って実相の世界に

超入する」ことが必要なのであります。そのためにこそわれわれは「深」般若波羅蜜多の行をする、すなわち神観の行をするのであります。

「深」は甚深微妙の意であり、般若は前述したとおり「智慧」である。人間知恵、五官でなく「実相智」である。「波羅蜜多」は「到彼岸」である、彼岸に渡るのである。彼岸とは、現象世界（アラワレの世界）を超えて、彼方の世界（実相世界）のことである。なにがなんでもまず、「人間が肉体である」という現象世界に眼をつぶれ、そして彼方の世界に渡ることだ。そして実相世界をわがものとするのである。「彼方」を「今・此処」とすることである。天国浄土を彼方の遠き世界に観ず、「今・此処」に顕現する。「今・此処」に把握する——これが、人間観のコペルニカスの転回をすることである。これが真の悔改めである。「悔い改めよ、神の国は今此処にあり」である。聖書の“Repent, for the kingdom of Heaven is at hand”を訳するとうなる。「神の国は近づけり」と在来の日本語訳聖書に訳されている意味は誤りである。“at hand”は「手の届くところに」今利用できるようにあるということである。神の国（浄土と言ってもよい）がここに手のとどく処に、利用できるようにあるのだ。諸君よこれを信ぜよ。信念は力である。信念だにあらば、神の国は今ここに即刻に実現するのだ。まず汝が「神の子」であることを信ぜよ。今現実世界に役に立つ神を信ぜよ、その時の信仰をわがものとせよ。事物に勝つためには神を味方としなければならぬ。米英の光明思想家は「現実に役に立つ神」を“available God”と呼んでいる。神を「今ここ」すなわち“Eternal Now”に把握するとき今ここに神

の生活が実現するのである。今が神の時であり、此処が神の処であり、この我が神の人である。この把握によって、在来の世界観、人間観が三百六十度転回する。(百八十度転回では、「平常心是道」——このままの生活に道を行ずるようにはならない。肉を否定して山へ籠る程度の小乗的悟りに墮する。肉体があるがままにそのままに空を観じて、そのままに金剛不壞身を自覚するのが大乘的悟りであり、人間観の三百六十度転回である)物質があるがままにそのままに空と観じて、そのままに靈的生命の世界、叡智充滿せる「神の国」(浄土)を今ここに自覚するのが大乘的悟りであります。釈迦もこの大乘的悟りに到達したのである。そこから奇跡を生じたのです。生長の家誌友中にも奇跡的治病や無限供給が起こる事実があるのもこの人間観・世界観の三百六十度転回によって、神の国(浄土)が今ここに実現するからであります。

## 第五章 『華嚴経』序講

### 六、仏の使命

仏のなすべきことは何であるかというところ、説法ということであります。そう言うとおかしく聞こえますけれども、「すべてのもの言によってつくらる、言葉は神なり」というキリスト教的立場からしましてもそうなのであります。仏教でも釈迦は『大無量寿経』の説法を終わると、「如来の応に作すべき所の者は皆已に之を作せり」と言われました。成仏するといふ場合の、「成る」という字は「化する」ではありません。「仏に化する」のでしたら仏でないものが仏に化るといふことになるのでありますけれども、成仏するといふと仏が鳴り出す

ことなのです。始めからわれわれは仏なのですけれども黙っている。黙っているのは成仏ではないのであります。成仏とは仏が鳴り出すことなのであります。天之御中主神が鳴り出してきたらこの蓮華蔵世界が現れたのであります。われわれは始めから仏である。しかし黙っているとまだ成仏していない、仏が鳴り出してないのであります。大通智勝仏は道場に結跏趺坐して十劫を経ても成仏しなかつたと『法華経』にあります。大通智勝仏は始めから仏である、その始めから仏であるものが成仏しないのはなぜであるかと『無門関』の公案にあります。「かれが成仏せざるなり」と答えています。が、本来仏であるものが成仏しないというのは鳴り出さない、すなわち、法輪をまだ転じないということであります。われわれは始めから仏であります。南無阿弥陀仏というところから成仏するのです。これは、仏が鳴り出したからであります。始めから仏であつたけれども鳴り出さなかつたから成仏しないのであります。

## 第六章 即身成仏の心理

### 十二

ここまで説いてきたならば、真相においてすでに成仏している自分を、現象においても成仏せしむる道は、ただそのまの心になればよいということがわかるのであります。形式から入ろうとするとむづかしく複雑であり、各宗派によって異なり、互いに秘密秘密として隠蔽し、封建的にある特殊の天分のある者でないと不可能であるといひ、多額の納金をしてないと伝授不能であると言つたりします。これではすべての

人は救われ難いのであります。民主的な宗教はもつと普遍的でなければならぬ。坐禅が何人にも行なわれ、念仏が何人にも行なわれているのは、その形式が簡単であるからであります。根本原理さえわかれば、真言秘密の行法ももつと簡単に誰でもできて誰でも救われるのであると信ずるのであります。わたしは左記に大師の『一期大要秘密集』より阿字観に關する説明を抜萃して月輪を觀じて心を清澄にし、湛然として清浄なる実相円明の心を自証せしめる方法を説きたいと思うのであります。

問う、「正しく之を觀ずる法云何ん。」

答う「若しは阿、若しは月、之を圖造せよ。その形、白珂（白色の珠）の色に染めて微妙嚴麗にして世に比類なくして持して淨処に懸けよ。四尺許りを去つて向つて端坐して眼を開くには下より上へ、眼を閉ずるには上より下へ、出入りの息に随つて之を觀じ、之を觀よ。「息を静かに吸うときに眼を開いて円月の図像を下より上へと順次見、息を静かに呼くときに図像を上より下へと順次見、息を調べ、心を静めてこれを繰り返して精神統一に入るのである」此の如く日を積むに、初心に見難けれども、後心には見易し。眼を閉じて向わざるに漸く頭れ見え去る。若し頭れるれば図造の月阿に向うなかれ。唯眼見を縁せよ。」

〔ただ眼の感覺を縁として心を静めるのである〕

ただこれだけのことなのである。説明は長いけれども実行は簡単であります。掛軸に開いた蓮華の花の上に浮かんでい

る直径二尺ぐらゐの円月の図像を描いてそれを上記の方法で觀ぜられるがよい。わたしなどは図造の月輪をつくるのが面倒であるので、神観の姿勢で坐し、瞑目合掌して、ただ瞼の裏に、虚空に白蓮華ありて、その上に直径二尺ぐらゐの月輪浮かぶと觀じて、それを見つめ、その月輪しだいに近づいて自分の全身を包むと觀じ、自分の全身の雰圍氣が淨円月の姿であると觀じ、精神がやや統一いたしましてから、「わが雰圍氣、淨月輪なり。わが姿、淨月輪なり」と口のうちに、あるいは心のうちに念じて自分自身が淨円月と一体であるという觀想の中に溶け込むのであります。

かくて精神統一の状態に入りましたとき、淨円月の中に坐せる自分の体を梵字阿の形に觀するのであります。それは「八葉の白蓮一肘の間、阿字素光の色を炳現す」とある弘法大師の阿字観の説明によつたものであります。そして、「阿字は大日如来の法身なり。われは阿字なり、大日如来の法身なり」さて結尾の思念に「われ阿字なり、大日如来の法身なり、われに淨円月の雰圍氣漂う。月の円満なるがごとく、自分も闕くるところなし、万徳を具足し一切種智を円満せり」と心中に念想するのであります。

生長の家で行なう阿字観は、真言密教で秘伝としていた法とは多少相違するかもしれませんが、人間の真相が「已成の仏」であるという根本真理からそれを実修するには、これで十分であります。いたずらに複雑な行法に捉われると心は惑うばかりであります。ただ、毎日実行して度を重ねることが必要であります。こんな觀想で菩提が成就するか疑われる人があるかもしれませんが、弘法大師は『一期大要秘密集』

に、「何んか観じて能くその菩提心を発すや」という問いに  
対して、

答う「文に云わく、夫れ無上菩提（仏のさとり）の心を発  
せんと欲えはまず深心をもって仏の法身を觀ぜよ」

と言っておられるのであります。阿字を觀ずるのは仏の法身  
を觀ずるのであります。觀ることは見すことであり、自身の  
心がそれになることであります。

問「若し爾すれば、此の三摩地を修するものは幾くの時分  
を歴て成就することを得るや。」

答「若し相續して修するに拠らば十二年を過ぎずして有相  
即ち成就し、無想も亦漸く現げん。」

問「若し爾すれば唯此觀を修して成仏を得るや。」

答「唯、此觀に依つて全く余習なし。懈怠小機のものも順  
次往生の大願を遂げ、精進大機のものも現身成仏・悉地  
を得ん。何をもつての故に、一心に万行を摂して行とし  
て行ぜざること無く、一觀に諸觀を含じて觀として觀ぜ  
ざるること無し。」

と、この方法によって断々乎として成仏疑いなしと弘法大師  
は証明しておられるのであります。十二年間相續修行する  
ことを要すとあつては、若い人にはその修行の暇があつても  
臨終の近い老人にはどうかと疑われるかもしれませんが、そ  
んな心配はありません。諸君は「已成の仏」であるのですか

ら、仮相の迷いは、あるように見えても本来無い、無いもの  
を滅するのに十二年間もかかるはずはないのであります。今  
すぐまっしぐらに、「われ阿字なり、大日如来の法身なり、わ  
れに淨円月の雰囲氣漂う。月の円満なるがごとく、自心も闕  
くるところなし、万徳を具足し、一切種智を円満せり（心月  
円満の觀）と觀ぜよ。その時、そのまま諸君は仏に成つてい  
るのであります。なぜなら実相においては時間はないからで  
あります。次に掲ぐる淨円月の十大願を毎日聖經誦の後ま  
たは、神想觀実修の直後に朗々と誦して、自己の潜在意識に、  
月の円満なるがごとく円満なる実相を印象せられますならば、  
自己の雰囲氣が浄化されて円満となり、人生に処しても何事  
も都合よく行くようになるのであります。

#### 淨円月の十大願

- 一、月の円満なるがごとく自心も闕くることなし。われ万徳  
を具足し、一切種智を成就せん。
- 二、月の潔白なるがごとく自心も浄白なり、われ自性浄白  
にして性徳円満なることを実現せん。
- 三、月の清浄なるがごとく自心も無垢なり。われ月のごとく  
自性清浄にして本より貪染なからんことを期す。
- 四、月の清涼なるがごとく自心も熱を離れたり。われ慈悲の  
水を灑いで、瞋恚の火を消さん。
- 五、月の明照なるがごとく、自心も照朗なり、われ本より  
無明を離れて光明遍く照らす。
- 六、月の独一なるがごとく、自心も独尊なり。われ諸仏の尊  
ぶところ、万法の歸するところなり。

- 七、月の円満なるがごとく、自心も偏かたよりを離れたり。われ常に中道を極めて永く辺執へんしつを越えんと欲す。
- 八、月の遅からざるがごとく自心も速疾そくしつなり。われ秘密の輪を転じて刹那せつなに惑わくを断たち心を浄じように遊あそばしめん。
- 九、月の巡しゆんてん転てんするがごとく、自心も無窮むきゆうに巡転しゆんてんす。われ正法の輪わを転てんじて邪迷じやめいの闇を破せん。
- 十、月の遍あまねく現あるがごとく、自心も遍あまねく静しずかなり。われ一体を分わかたずして九界の前に現あじ多身を仮からずして十方の土に臨まみ一切苦厄くやくある者の暗やみを照あらさん。

(弘法大師の阿字円月観の説明の円月の十大功德による)

生命の實相 日本教分社 谷口雅春

## 阿 卍 卍

阿字 (梵字の第一字母)